

高大連携活動に参加する高校生の特徴についての検討

中里陽子*・安成英樹**

お茶の水女子大学 教育開発センター*・お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科**

Profiles of high school students participating in university related cooperative activities

Yoko NAKAZATO* and Hideki YASUNARI**

Ochanomizu University; Center for Research and Development of Education*, Graduate School of Humanities and Sciences**

Universities engage in student recruitment through the cooperative education activities with high schools. The purpose of this study was to examine the characteristics of high school students participating in the university related cooperative activities, which tried to indicate the process how the cooperative activities lead to acquire the high scholastic level enrolled students. Questionnaires were administered for 243 participants in Ochanomizu University activity in 2015. The results showed that most of the participants tended to search the information about the activity on the Internet or from the high school teachers. Future research needs to examine the mechanism how the cooperative activities lead to acquire the high scholastic level students, according to the other universities cases.

keywords : university related cooperative activity, student recruitment, enrollment management

問題

近年では、大学側が入学者の獲得を狙いとしながら、その候補となる高校生への教育を先取りして行う高大連携活動が増えてきている。本研究では、高大連携活動がいかにして優秀な入学者の獲得に結びつくかを解明するための予備的研究として、高大連携活動に参加する高校生の特徴を検討することを目的とする。

高大連携活動の意義

高大連携活動とは、高校と大学がそれぞれの教育資源を活用し、連携しながら行う教育活動である（勝野、2004）。具体的活動として、オープンキャンパス、公開授業、研究室訪問などが挙げられる。これらの関係性については、大学側のねらい（教育志向、大学紹介志向）と高校生の活動形態（情報受信型、体験型）の2つの指標を用いて説明することができ、Figure 1のように整理することができる。

高大連携活動は、1991年の中央教育審議会による「教育上の例外措置」発令によって開始されたと言える。具体的には、特定の分野で能力の伸長が著しい者に対して、大学レベルの教育研究に触れる機会を与えるよう提言がなされている。このような経緯から、高

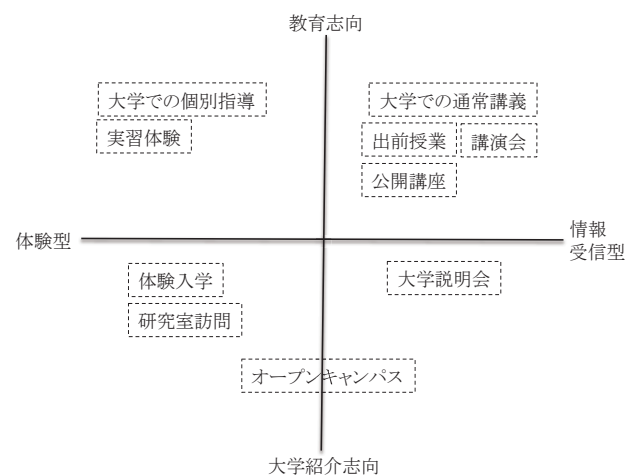


Figure1 高大連携活動の類型化

大連携活動は高校と大学がそれぞれの教育資源を活用する取組であるといえども、実際には高校からの教育機会の提供は少なく、大学による提供の方が多い（勝野、2004；長崎、2010）。

特に近年では、大学側が入学者の獲得を狙いとし、その候補となる高校生への教育を先取りして行う高大連携活動に取り組むケースが増えてきている。この要因として、次の3つが考えられる。

第1に、大学進学者の質が多様化したことにある。大学や短期大学への進学率は50%を超え（文部科学

省、2005)、わが国では大学や短期大学の進学希望者と進学者数が一致する大学全入時代を迎えた。大学で学ぶことの意味や目的意識が希薄になり、授業内容を理解せず、関心すら示さない学生が多くなった。こうした現状をふまえ、高大連携活動は、多様な学生を高校から大学へ円滑に移行させる高大接続過程の一部として、入試選抜方法の多様化や大学入学後のリメディアル教育(初年次教育)とともに積極的に進められている。

第2に、大学のアドミッションポリシーに適合する学生の獲得が求められていることにある。私立大学の約4割(2007年度)は入学定員を充足できず(中央教育審議会大学分科会、2010)、最近では大学が高校生を選抜するのではなく、高校生が大学を選択する時代になった。大学は積極的に自校をアピールし入学者を増やすことが求められている(勝野、2004)。こうした状況を考慮し、大学は高大連携活動を学生獲得戦略の一つとして活用していることも報告されている(長崎、2010)。

第3に、大学に地域貢献の機能が求められるようになったことも挙げられる。地域社会の発展を図る上で、「地(知)の拠点」としての大学による地域貢献に大きな期待が寄せられており(文部科学省 2012, 2013)、近年では大学と地域社会をつなぐ教育実践の一つとして、高大連携活動が導入されてきている。

こうした背景により、大学は積極的に高大連携活動を進めている。そして、数々の事例調査によって、高大連携活動は総じて、高校生の学習意欲を高めたり、地域活性化を促進することが確認されている(e.g., 花崎・杉山・花崎・橋本、2006; 渡邊、2011)。さらに、高大連携活動に在学学生を積極的に関与させることで、在学学生自身の能力向上が促進されることも指摘されている(花崎ら、2006; 大久保、2011)。これらの研究知見を整理すると、高大連携活動は、高校生、大学生、地域のそれぞれにポジティブな効果をもたらすと捉えることができる。

高大連携活動が入学者獲得につながるプロセス

高大連携活動は、一般的には入学者の獲得につながると想定されている。たとえば、平尾・大竹・久保・山内(2011)は、模擬授業への参加経験の有無が志望順位に与える影響を検討し、模擬授業に参加した経験がある人の方が志望順位が高いことを明らかにしている。また、大久保(2011)は、福井大学の事例に基づき、高大連携活動への参加を通して明確な目的意

識を獲得したAO入学志願者が増加していることを報告している。

ところが、高大連携活動が入学者の獲得にどのようにつながるかに関する知見は乏しい。大学入学前の大学情報の収集頻度や大学主催イベントへの参加経験の有無が入学後の教育に対する満足度や学業成績、卒業率と密接にかかわっているという知見(たとえば渡辺、2007; 沖、2009)を考慮すると、高大連携活動が優秀な入学者獲得に結びつく過程を理論的に解明することは、入学者の確保だけでなく入学後の学生の成長を確実にする上で必要不可欠であると考えられる。

そこで本研究では、高大連携活動が入学者獲得につながる過程に関わる理論的示唆を得るための予備的研究として、高大連携活動に参加する高校生の特徴を検討する。具体的には、高大連携活動に参加する高校生は高大連携活動の開催情報をどのように収集し、参加を決めているのか、またどのような入試方法を受験時の選択肢として検討しているかを明らかにする。

方法

調査対象者

本研究では、平成27年度お茶の水女子大学プレゼミナール1日目の参加者のうち、お茶の水女子大学附属高校の1年生を除く高校生および高校教員合計243名を対象とした分析結果を整理する。

お茶の水女子大学プレゼミナールとは、お茶の水女子大学が平成27年度より開始した高大連携を目的とした全学的な取り組みである。この取り組みの目的は、高校生および高校教員に最先端の研究に触れてもらいながら、お茶の水女子大学の校風や大学教育を理解してもらうことにあった。プレゼミナール1日目には、講義と演習を織り交ぜたセミナーを多数開催し、参加者には教員からの一方的な知識提供型の講義を受講してもらうだけでなく、演習やグループワークを通して、習得した知識を活用する能動的な学びを体験してもらうことをねらいとしていた。

また在学学生を授業補助につけたり、セミナー終了後に参加者との懇談を設けるなど、参加者と在学学生の交流の場を多く設定した。参加者がお茶の水女子大学の学生生活を明確にイメージし、お茶の水女子大学への入学動機を高めることをねらいとしていた。

さらに、本プレゼミナールは、平成29年度入学者選抜より導入予定の新型AO入試(新フンボルト入試)のPRも兼ねていた。お茶の水女子大学新フンボルト

Table 1 平成 27 年度お茶の水女子大学プレゼミナール開講セミナー一覧

●文系セミナー

基調 講義	格差に迫る	教育社会学
1	バイリンガルのことば:「学習言語」をめぐる格差について考える	バイリンガル教育
2	江戸時代の社会と格差:身分研究の最前線	日本近世史
3	格差のないところに格差をつける?:子どもの奪い合い裁判について考える	新領域法学
4	日本の不平等は大きいか:社会現象の測定	社会学
5	世界の教育格差とその解決策について考えよう	教育開発論

●理系セミナー

A	新野菜開発から考える日本の農食	生活科学部食物栄養学科
B	応用的分野としての工学～環境対策技術を例として～	生活科学部人間・環境科学科
C	暗号のしくみと作り方	理学部数学科
D	ふつうにカオス	理学部物理学科
E	温かい氷をつくろう	理学部物理学科
F	量子論～ミクロな世界の運動法則とその応用～	理学部物理学科
G	印象派物理学入門	理学部物理学科
H	Gravity Zero	理学部化学科
I	生物”ミクロ世界”の時空間解析	理学部生物学科
J	生物”ナノ世界”の分析	理学部生物学科
K	生物”数千万年の歴史”解析	理学部生物学科
L	ページランク:グーグル検索の秘密を高校数学とプログラミングで読み解こう!	理学部情報科学科

入試は、基礎学力や情報収集力、分析力、柔軟性等を対象とした多面的な測定を予定している。このような選抜にどのようなねらいが含まれているかを紹介し、新型 AO 入試受験へ誘引するために、平成 27 年度のプレゼミナールは実施された。第 1 回目の開催となる平成 27 年度は、8 月 24 日 (月)、25 日 (火) の 2 日間にわたってお茶の水女子大学 (東京都文京区) にて開催された。

プレゼミナール 1 日目に開催されたセミナーは Table 1 の通りである。文系では「格差」をテーマとして、基調講義と、それに続く 5 つのセミナー (分野は日本近世史、バイリンガル教育、社会学、教育開発論、新領域法学) を開講した。理系では、数学、物理、化学、生物、情報科学、食物栄養学、環境学の最先端の研究に基づくセミナーを開講した。2 日目には、次年度導入予定の図書館入試の模擬体験や大学院生による課題発表会を実施した。

プレゼミナールの広報活動として、本学に受験実績のある高校 150 校や全国の SSH および SGH 指定校に郵送、FAX、メールによる開催案内を送付した。また、近隣高校および予備校への直接訪問を行い、パンフレット配布による広報を行った。

このような広報を受けて参加した高校生および高校教員 243 名を本研究では調査対象とし、1. プレゼミナールをどのように知ったのか、2. 誰に相談して参加を決めたのか、3. どのような入試形態を受験対象として考えているかを明らかにすることを目的とする。なお本研究では、高校生の特徴をより明確にする比較対象として高校教員の参加者も分析対象とした。

質問票の構成

質問票は、次の 6 項目で構成されている。

第 1 は、高校所在地についてである。所属する高校の所在地を、都道府県名で回答してもらった。

第 2 は、高校区分についてである。所属する高校の区分を、「国立」「公立」「私立」「その他」の 4 つの中から 1 つ選択してもらった。

第 3 は、お茶の水女子大学への志望度についてである。現在のお茶の水女子大学への志望度を「第 1 志望」「第 2 志望」「第 3 志望」「特に考えていない」の 4 つの中から選択してもらった。

第 4 は、プレゼミナールを知ったきっかけである。本調査では「a. 高校」「b. お茶の水女子大学ホームページ」「c. お茶の水女子大学オープンキャンパス」「d.

お茶の水女子大学プレゼミナール」「e. 受験案内雑誌」「f. 予備校・塾」「g. 両親から聞いた」「h. 友達から聞いた」「i. その他」の選択肢を設け、プレゼミナールを知ったきっかけとして該当するものを全て選択してもらった。

第5は、参加を決めたきっかけである。プレゼミナールへの参加を決めるにあたり、誰に相談したかを尋ねた。本調査では、「a. 高校の先生」「b. 両親」「c. 予備校や塾の先生」「d. 自分一人で決めた」「e. 友達」「f. その他」の選択肢を設け、該当するものを全て選択してもらった。

そして第6は、大学受験で利用したい入試方法である。本調査では、現時点で大学受験時に利用したい入試方法として、「a. 一般入試」「b. センター試験利用入試」「c. 推薦入試（一般）」「d. 推薦入試（指定校推薦）」「e. 帰国子女入試」「f. AO入試」「g. 3年次編入」「h. その他」の選択肢を設け、該当するものを全て選択してもらった。

結果

参加者の属性 (Table 2, 3)

プレゼミナール1日目参加者243名の属性をTable 2に示す。参加者全体のうち、高校2年は67.1%、高校3年は27.2%を占めていた。高校所在地別にみると、関東の高校からの参加者が最も多く、74.5%を占めていた。学校区分別にみると、私立高校からの参加者が48.6%、公立高校からの参加者が44.4%を占めていた。

高校所在地別の学年および学校区分の整理をTable 3に示す。高校所在地別にみると、関東、中部、関西、中国、四国地方からの参加者は高校2年生が多く、東北、九州地方からの参加者は高校3年生が多かった。また、関東、中部、関西地方では、私立高校からの参加者が多く、東北、四国、九州地方からは、公立高校からの参加者が多かった。

参加者のお茶の水女子大学への志望度 (Figure 2)

参加者のお茶の水女子大学への志望度を、Figure 2に示す。高校2年生、3年生ともに、お茶の水女子大学への志望度を「第1志望」と回答する者が最も多かった。高校2年生については66%が、高校3年生については89%の者がお茶の水女子大学を第1志望としてプレゼミナールに参加していた。

プレゼミナールを知ったきっかけ (Table 4)

プレゼミナールを知ったきっかけとして、あてはまるものを複数選択してもらった。最も多く選択されたのは「オープンキャンパス」で、回答選択率は62%を占めていた。東北、関東、中部地方では、「オープンキャンパス」と回答した割合が、全体傾向(62%)よりも特に多かった。他方、関西、中国、四国、九州地方では、「お茶の水女子大学ホームページ」と回答した割合が全体傾向より多かった。

参加を決める際の相談相手 (Table 5)

プレゼミナールに参加するにあたり、誰に相談したかを尋ねた。提示項目のうちあてはまるものを複数選択してもらった。最も多かったのは「両親と相談した」で、回答選択率は65%を占めていた。高校3年生については、「高校の先生と相談して決めた」が全体傾向の割合よりも高かった。

大学受験で利用したい入試方法 (Table 6)

大学受験で利用したいと考えている入試方法を尋ねた。各入試方法の選択率をTable 6に示す。全体で見ると、「一般入試」の選択率が最も高く、81%を示していた。次いで、「AO入試」(48%)、「推薦入試」(47%)も多く選択されていたが、選択率は50%を

Table 2 参加者の特性 (N =243)

質問項目	回答カテゴリ	回答者数	割合
学年	高校2年	163	67.1%
	高校3年	66	27.2%
	高校教員	14	5.8%
高校所在地	北海道	1	0.4%
	東北	5	2.1%
	関東	181	74.5%
	中部	29	11.9%
	関西	9	3.7%
	中国	7	2.9%
	四国	3	1.2%
	九州	6	2.5%
	その他	2	0.8%
学校区分	国立	16	6.6%
	公立	108	44.4%
	私立	118	48.6%
	無回答	1	0.4%

Table 3 高校所在地別学年および学校区分

	度数 列%	北海道	東北	関東	中部	関西	中国	四国	九州	その他	合計
学年	高校2年	1 100%	2 40%	125 69%	22 76%	5 56%	3 43%	2 67%	2 33%	1 50%	163 67%
	高校3年	0 0%	3 60%	47 26%	6 21%	3 33%	2 29%	1 33%	3 50%	1 50%	66 27%
	高校教員	0 0%	0 0%	9 5%	1 3%	1 11%	2 29%	0 0%	1 17%	0 0%	14 6%
学校 区分	国立	0 0%	0 0%	13 7%	0 0%	1 11%	1 14%	0 0%	1 17%	0 0%	16 7%
	公立	1 100%	5 100%	82 45%	12 41%	0 0%	3 43%	2 67%	3 50%	0 0%	108 44%
	私立	0 0%	0 0%	86 48%	17 59%	8 89%	3 43%	1 33%	2 33%	1 50%	118 49%
	無回答	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	1 50%	1 0%

※色付けされたセルは各高校所在地における最頻値を示す。

満たしていなかった。「AO入試」の選択率は、東北、関西、九州で特に高かった。

考察

本研究では、高大連携活動が入学者の獲得につながる過程に関わる理論的示唆を得るための予備的研究として、高大連携活動に参加する高校生の特徴を検討することを目的としていた。

高大連携活動は、優秀な高校生に対して質の高い教育機会を与えることを目的として開始された。ところが近年では大学教育の大衆化に伴い、学習意欲に乏しい生徒を高校から大学に円滑に移行させることや、大学のPR戦略の一つとして活用されてきている。これらの取組が入学者確保につながる事例は従来報告されてきているものの、それに至るまでの過程については明らかにされてこなかった。

本研究では、高大連携活動が入学者獲得につながる過程の理論的示唆を得るために、高大連携活動に参加する高校生の特徴を検討した。お茶の水女子大学が全学的に取り組む高大連携活動の一つである平成27年度プレミナール参加者を対象とした調査の結果、高

大連携活動に参加する高校生は、3年生よりも2年生の方が多かった。また、参加者の多くは近隣の高校に在籍する者であったが、東北や九州地方などの遠方から参加する高校生については、3年生の割合が多かった。また地域によって私立高校からの参加者と公立高校からの参加者の比率も異なっていた。

高大連携活動の存在を知ったきっかけとしてオープンキャンパスを挙げる者が多かった。ただし、関西、中国、四国、九州等の西日本を中心とした地域ではホームページによって情報を入手したと答える学生の割合が全体傾向よりも多かった。高大連携活動に参加するにあたり、両親と相談する者が半数以上おり、特に高校3年生については高校の先生が相談相手として挙げられる傾向があった。

さらに、参加者の多くはお茶の水女子大学を第1志望と考えており、検討している受験形態として最も多かった回答は、「一般入試」であった。

これらの結果と従来の研究知見を結びつけると、高大連携活動が入学者獲得につながるプロセスは次のように考えられる。まず、高校生は近隣居住の者を中心に大学が主催する高大連携活動に参加する。このとき、高校生は第1志望の大学であることを前提として参加を決める可能性がある。また、近隣の者はオープンキャンパスで、遠方の者はホームページで情報を収集し、両親や高校の先生に相談あるいは後押しを受けることで参加を決定する。高大連携活動を受講することで、改めて大学の校風を確認し、意思を固め受験に結びつける。本研究で得られた知見をふまえ、大学は高大連携活動を戦略的に仕掛け、入学者獲得に注力することが求められる。

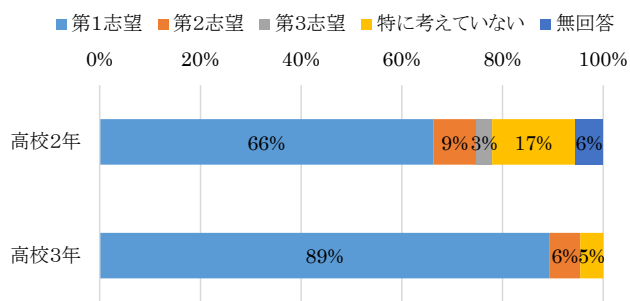


Figure2 本学への志望度

Table 4 プレゼミナールを知ったきっかけ

	選択者数 選択率%	高校	本学ホーム ページ	オープン キャンパス	受験雑誌	予備校・ 塾	両親から 聞いた	友達から 聞いた	その他
学年	高校2年	19 12%	26 16%	107 66%	0 0%	1 1%	11 7%	5 3%	1 1%
	高校3年	11 17%	14 22%	39 60%	0 0%	0 0%	5 8%	0 0%	2 3%
	高校教員	3 23%	4 31%	4 31%	0 0%	0 0%	0 0%	1 8%	1 8%
学校区分	国立	7 44%	1 6%	8 50%	0 0%	0 0%	1 6%	0 0%	0 0%
	公立	10 9%	20 19%	66 62%	0 0%	1 1%	7 7%	4 4%	2 2%
	私立	16 14%	23 19%	75 64%	0 0%	0 0%	8 7%	2 2%	2 2%
	無回答	0 0%	0 0%	1 100%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
学校所在地	北海道	0 0%	1 100%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
	東北	0 0%	1 25%	3 75%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
	関東	30 20%	25 17%	115 77%	0 0%	1 1%	11 7%	5 3%	3 2%
	中部	0 0%	5 17%	21 72%	0 0%	0 0%	2 7%	1 3%	1 3%
	関西	1 13%	4 50%	4 50%	0 0%	0 0%	1 13%	0 0%	0 0%
	中国	0 0%	4 57%	3 43%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
	四国	1 50%	1 50%	0 0%	0 0%	0 0%	1 50%	0 0%	0 0%
	九州	1 20%	2 40%	2 40%	0 0%	0 0%	1 20%	0 0%	0 0%
	その他	0 0%	1 50%	2 100%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
全体(合計)	33 14%	44 18%	150 62%	0 0%	1 0%	16 7%	6 2%	4 2%	

※セル内上値は選択者数、下値は選択率(選択者数を各列の回答者数で割った値)

※全体合計の選択率より10%以上高いものをオレンジ色、10%以上低いものを青色で示す

今後の研究課題として、次の3点が挙げられる。

第1に、本研究では高大連携活動に参加した後の意識変化や行動変化を具体的なデータに基づいて実証できていない。従来でも、高大連携活動の効果検証を試みた研究は進められてきたが、その殆どは質的研究であった(e.g., 大久保, 2011)。数少ない定量的な調査においても、学生の満足度等に基づいた集計結果の検討にとどまっており(e.g., 中畝, 2011)、教育効果の定量的な解析は体系的になされていない。高大連携活動の効果検証として、高校生が何を学び、どのような活動と関連づけ大学受験に結びつけるか、その一連のメカニズムを定量的に研究していく必要があると考えられる。

第2に、本研究ではあくまで、一つの高大連携活動の参加者のみを対象としており、高大連携活動の総合的な傾向として一般化されるかは検討の余地が残さ

れている。本研究で調査対象としたお茶の水女子大学プレゼミナールを事例とした調査を継続して積み重ねていくことと並行して、他大学の事例との関係を明らかにすることで、高大連携活動が入学者の獲得および入学後の学生の能力向上につながるメカニズムの解明が実現されると考えられる。

そして第3に、お茶の水女子大学プレゼミナールの参加者の殆どがお茶の水女子大学を第1志望とする者であった。現在お茶の水女子大学では、プレゼミナールの継続に向けた準備を本格的に始めている。今後は、お茶の水女子大学を第1志望としない高校生をいかに本学受験へ誘引していくかを検討することが課題となるであろう。

謝辞

本論文の執筆にあたり、本学入試推進室の山本隆副

Table 5 参加を決める際の相談相手

	選択者数 選択率%	高校の先生と 相談して決め た	両親と相談し て決めた	予備校や塾の 先生と相談し て決めた	友人と相談し て決めた	自分一人で決 めた	その他
学年	高校2年	9 6%	116 71%	1 1%	6 4%	35 21%	2 1%
	高校3年	16 24%	37 56%	0 0%	3 5%	19 29%	0 0%
	高校教員	0 0%	1 14%	0 0%	0 0%	6 86%	0 0%
学校区分	国立	2 13%	4 27%	0 0%	3 20%	6 40%	0 0%
	公立	17 16%	73 70%	0 0%	2 2%	19 18%	2 2%
	私立	6 5%	77 66%	1 1%	4 3%	34 29%	0 0%
	無回答	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	1 100%	0 0%
高校所在地	北海道	0 0%	1 100%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
	東北	4 80%	2 40%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
	関東	14 8%	110 63%	1 1%	8 5%	51 29%	2 1%
	中部	3 10%	23 79%	0 0%	1 3%	4 14%	0 0%
	関西	2 22%	6 67%	0 0%	0 0%	2 22%	0 0%
	中国	1 17%	4 67%	0 0%	0 0%	1 17%	0 0%
	四国	0 0%	3 100%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
	九州	1 17%	4 67%	0 0%	0 0%	1 17%	0 0%
	その他	0 0%	1 50%	0 0%	0 0%	1 50%	0 0%
全体(合計)	25 11%	154 65%	1 0%	9 4%	60 25%	2 1%	

※セル内上値は選択者数、下値は選択率（選択者数を各列の回答者数で割った値）

※ 全体合計の選択率より 10% 以上高いものをオレンジ色、10% 以上低いものを青色で示す

室長（入試課長）、AO 入試室アカデミックアシスタントの池田美千子さん、松尾有里子さんにご指導をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

中央教育審議会 (2010) 「大学分科会で検討を要する課題(案)、大学分科会(第92回)配付資料」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/_icsFiles/afieldfile/2010/11/24/1299237_2_1.pdf (平成27年11月24日閲覧)。

中央教育審議会 (1991) 「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について(答申)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309574.htm (平成27年11月24日閲覧)。

花崎美紀・杉山裕司・花崎一夫・橋本功 (2006) 「地域価値を高める双方向高大連携の試み」『地域ブランド研究』2, 145-168.

平尾智隆・大竹奈津子・久保研二・山内一祥 (2011) 「ある国立大学における入試広報の効果測定-志望順位を決定する要因-」『大学評価・学位研究』12, 19-28.

勝野頼彦 (2004) 『高大連携とは何か—高校教育から見た現状・課題・展望—』学事出版。

文部科学省 (2005) 『学校基本調査』。

文部科学省 (2012) 「大学改革実行プラン」 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/1321798.htm (参照日 2014.11.02)。

文部科学省 (2013) 「地(知)の拠点整備事業」 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/ (参照日 2014.11.02)。

中畝菜穂子 (2011) 「第2章第1節 入試問題を用いた高大連携—新潟大学ヴァーチャル入試体験—」 pp.65-

Table 6 大学受験で利用したい入試方法

選択者数 選択率%	一般入試	センター試 験利用入試	推薦入試 (一般)	推薦入試(指 定校推薦)	帰国子女 入試	AO入試	3年次編入	その他
高校2年	134 82%	84 52%	38 23%	19 12%	1 1%	81 50%	0 0%	0 0%
高校3年	52 79%	24 36%	28 42%	5 8%	0 0%	24 36%	1 2%	3 5%
高校教員	9 82%	4 36%	7 64%	3 27%	0 0%	9 82%	0 0%	0 0%
国立	5 33%	4 27%	2 13%	4 27%	0 0%	7 47%	0 0%	2 13%
公立	91 84%	50 46%	36 33%	15 14%	0 0%	45 42%	1 1%	0 0%
私立	99 85%	58 50%	35 30%	8 7%	1 1%	62 53%	0 0%	0 0%
無回答	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	1 100%
北海道	1 100%	1 100%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
東北	5 100%	1 20%	3 60%	0 0%	0 0%	4 80%	0 0%	0 0%
関東	152 84%	86 48%	51 28%	21 12%	0 0%	82 46%	1 1%	2 1%
中部	19 66%	18 62%	11 38%	4 14%	1 3%	14 48%	0 0%	0 0%
関西	7 88%	2 25%	3 38%	0 0%	0 0%	7 88%	0 0%	0 0%
中国	4 57%	2 29%	1 14%	0 0%	0 0%	3 43%	0 0%	0 0%
四国	2 67%	1 33%	1 33%	1 33%	0 0%	1 33%	0 0%	0 0%
九州	5 100%	1 20%	2 40%	1 20%	0 0%	3 60%	0 0%	0 0%
その他	0 0%	0 0%	1 50%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	1 50%
全体(合計)	195 81%	112 47%	73 30%	27 11%	1 0%	114 48%	1 0%	3 1%

※セル内上値は選択者数、下値は選択率(選択者数を各列の回答者数で割った値)

※全体合計の選択率より10%以上高いものをオレンジ色、10%以上低いものを青色で示す

75. 東北大学高等教育開発推進センター編『高大接続関係のパラダイム転換と再構築』東北大学出版会。
長崎政浩(2010)「大学と地域教育の連携に関する一考察—学校教育と大学の新しい協働の構築に向けて—」『高知工科大学紀要』7(1). 243-253.
沖清豪(2009)「高校での経験や受験と大学満足度—学生募集戦略への示唆—」進研アド『Between』2009年秋号 pp.42-43.
大久保貢(2011)「第1章第2節 草の根の高大連携活動とAO入試」pp.41-52. 東北大学高等教育開発推進センター編『高大接続関係のパラダイム転換と再構築』東北大学出版会。

渡辺哲司(2007)「大学について調べる入学前の行動と入学後成績」『大学教育学会誌』29(1), 164-168.
渡邊利夫(2011)「第2章第3節 高大連携活動と町おこしについて」pp.119-132. 東北大学高等教育開発推進センター編『高大接続関係のパラダイム転換と再構築』東北大学出版会。

2015年12月8日 受稿